

## ロマン派ピアノ音楽の時間論的研究——ショパンの場合（2）

大阪芸術大学 芸術計画 教授 田之頭一知

本研究は2017年度の研究の延長線上に位置し、19世紀ロマン派を代表する作曲家フレデリック・ショパン（1810-1847）のピアノ音楽の特質を、時間論的観点から炙り出そうと試みるものである。実際、ピアノの詩人とも言われる彼の音楽は、旋律あるいはピアノの響きが紡ぎ出す歌に支えられていると言ってよく、その音楽の魅力は、和声を背景としたまさに旋律の自在な進展に、その歌のいわば自律的な展開にある。言葉を換えれば、ショパンの音楽は、まずもって響きの時間的進展にこそ、その力の源があると考えられるのである。ただし、ここで着目しなければならないのは、彼の音楽はその旋律の自在さあるいは響きの自律的な展開とは裏腹に、形式がきわめて堅固で明瞭であるという点である。彼のピアノ曲は、明確な形式があるおかげで、響きが自由に飛翔できるようになっているのであり、堅固な枠組みが響きの自在な動きを触発していると言ってよい。それゆえ、彼の音楽を考察するにあたっては、楽曲の形式構造を析出することと、その旋律の展開を記述することが重要である。この観点に立てば、和声はむしろ、旋律の進展、響きの展開を推し進めてゆく原動力となっていると考えられよう。このような大きな見通しに立って本研究は彼の楽曲を考察しようとするものであるが、ここでは紙幅の関係から、ピアノ・ソナタ第2番と第3番に触れることにしたい（使用した楽譜はエキエル版である）。

まずピアノ・ソナタというジャンルであるが、通例3つないし4つの楽章からなるソナタにおいて重要な形式は、言うまでもなくソナタ形式である。この形式は主題の現われ方という観点からは、提示部－展開部－再現部という3部構成と解されるが、調構造の観点からは、主調から属調へ進む前半部と、転調による調構造の揺らぎを経て主調に復帰し構造の安定を取り戻す後半部の2部構成となる。詳述することはかなわないが、ソナタ形式は、主題から見た3部構成と、調性から見た2部構成の融合ないし合体なのであり、提示部や展開部などが截然と区別され、それぞれが明確に分かれているわけではない。むしろソナタ形式は、提示部において示された音楽的問題、それを「主題」とした楽曲の「展開図式」と言ってよいのであって、各々の部分は分節されるとともに連結されているのである。それゆえ、ソナタ形式の根底に透けて見えるのは、音響運動や響きの連続に何らかの有機的なまとまりを与える態度と言ってよい。言葉を換えれば、ソナタ形式は変化するものと変化しないものとのダイナミックな関係を通して楽曲の同一性の確保を狙った形式であり、そのために、曲全体の展開に有機的なまとまりが求められるのである。したがって19世紀にあっては、ソナタ形式で原理上重要なのはその有機的性格である。とすれば、どんな観点に立って、つまり、どのような音楽的問題意識を持って、響きの進展である楽曲の展開にまとまりや統一性を持たせようとしているのかを明らかにしなければならない。もちろんソナタというジャンルを構成する各々の楽章が、

すべてソナタ形式で作曲されるということはない。ただ最初の楽章はソナタ形式で作曲されるのが通例であり、この形式が有機的なまとまりを視野に収めたものであるとすれば、ソナタ全体もまた、まとまりや統一性を持つものと捉えることができよう。言葉を換えれば、ソナタ形式楽章の特徴が、何らかのかたちでそのソナタ全体に浸透しているとみなすことができるように思われる。

今しがた述べた観点からピアノ・ソナタ第2番と第3番を眺めてみると、まず第2ソナタにあっては、楽曲全体を響きのレヴェルでまとめてゆこうとする意識が希薄であり、むしろ響きそれ自身の展開において意識的に“破れ”を作り出そうとしていることが分かる。それはソナタ形式楽章である第1楽章の第1主題が、切迫するような響き、駆り立てられるような動きを示していることに暗示されており、それが最終楽章の佇まいにこだましている。その第4楽章は調性がはっきりせず、うねるような、転がり回るような響きに終始しているが、そのような音の扱いは、それまでの3楽章を費やして示してきた響きの在りようを無にする働きを持っている。そこには楽曲構造に組み込まれた意外性という要素が横たわっていると言ってよいだろう。この意外性という要素によって、私たちの意識は今鳴り響いているフレーズへと導かれることになり、音楽的な流れの中で今現在という時間様相が屹立することになる。

一方、第3ソナタは、ソナタ形式楽章である第1楽章において、旋律的フレーズの連想あるいは紡ぎ出しと呼び得る作業が行なわれており、それによって第1楽章が、いくつかの印象的な旋律的フレーズのアマルガムと言ってよいようなものになっている。そのため、各々のフレーズ間に流れるような連携はなく、どちらかと言えばごつごつした肌触りの響きの塊が、或るときは溶け合い、或るときはぶつかり合うといった様相を呈することになる。このような音の佇まいが、第3ソナタの場合も最終楽章に溶け込んでいる。フィナーレはロンド形式で、主要主題が響きのダイナミックな流れの中で幾度か姿を現わすが、その現われ方は、楽章の進展においてみずからのかたちを明確にし確固としたものにしてゆくという方向性を示している。ロンド主題のくっきりした姿が、響きの奔流の中で削り出されてゆくのである。これは音楽の時間的展開の中で、主題が時間の流れによって彫琢されるということを表わしていると言ってよいであろう。とすればそれは、過去と未来を貫いて流れている時間の大きなうねりの中で、音楽によって今現在の充溢が形成され、私たちの意識がそこへ引き寄せられることを意味しよう。このように、第2番は現在の屹立を、第3番は現在の充溢を歌い上げ、ともに現在という時間様相に焦点を合わせた音楽となっているのである。